福音合同セミナー（2）（御殿場ＹＭＣＡ東山荘）

御霊の実

――福音を真に生きる――

２０２４年５月26日
弘野慶次郎

第六転　十字架（ゴルゴタ）　御霊の実　赤ちゃんの生き方　盲人バルテマイとザアカイ　イエスは命のパン　目標を目指してひたすら走る

●第六転　十字架（ゴルゴタ）

奥田昌道先生は、家を開放して、若い魂をずうっと育ててこられた。そしてもう91歳になられたわけですから、これは大変な福音を我々は学んだわけです。奥田先生の体力が落ちてきたら、集会をどうしたらいいのか。奥田先生の集会そのものは主が建てられた。自分がやったのではない。これは神さまが作ってくださった召団である。今後どうなるか分からないけれども、我々は祈って、どうしてもこの福音を伝えていきたい。どういう形になるかは分からないけれども、この尊い福音を何とかして皆さんと一緒に分かち合いながら伝えていけたらなぁという思いです。一人ひとりがそういう思いでやっていく。福音はなかなかそんなに簡単には伝わらないけれども、やはり何かやっていると、必ず何か芽が出てくる。それは神さまの願いですから、それは絶対に成っていくと僕は確信している。

今日は、「福音を本当に生きていこう」というテーマの続きで、『無者キリスト』の115頁から読んでいきたいと思います。これは112頁の「十字架（ゴルゴタ）」の項〔第一部 キリストの十転 第六転「十字架（ゴルゴタ）」〕で非常に長いので、はしおって読んでいきたいと思います。115頁の４行目から。

≪　第六転　十字架（ゴルゴタ）

……一方の悪人はイエスを罵って、ふてくされた言葉を吐いた。他方の悪人は今度はイエスに向って、

「み国にお入りになるとき、〔せめても〕私を憶えてください」

と（現行訳は「御国の権威をもっておいでになるときに」とある）、心情を吐露して願った。人間の交りの世界でも、いつまでも友人に憶えられているということは、大きな慰めである。況してや、神の子キリストに憶えていただくことは、この悪人にとって、存在的な救いにあずかることである。神を畏れる砕けの心から滲み出た悪人の平伏しの悲願は、イエスの本願の心の緒琴の琴線に深く触れたのである。この悲願に対して、イエスの本願はなんとひびき出たか。

「私は本当にお前に言う。今日、私と一緒に、お前はパラダイスだ！」（私訳）

これほどなぐさめ深い、情け深い、どん底の思い遣りの、抱きかかえの、白熱の愛の言葉があろうか。私には正直なところ、これがイエスの言(ことば)の中の最愛の言である。私の全存在はこの言に荷(にな)われている。抱かれている。私は愛に飢え渇いている男だ。力あるイエスの愛。決して棄てない愛、うらぎらない愛。生命を与え、歓喜をみなぎらせ、光で包み、愛泉を湧き出させ、大慈悲心をわがうちに起こさせ、大乗的に生かしめるイエスの愛！　私はこの愛で生きている。呼吸している。今日も、明日も、次の日も。地上にある限り、毎日毎日がイエスと共にパラダイスなのである。しかし私は人間だ、私は弱い。時折ぶっ倒れたくなる。その時イエスの足もとに。彼は抱き、ふところに入れてくださる。その時キリストと私は一つだ。パラダイスだ！

「今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」

これが私の根源現実である。きよいのきよくないの、義(ただ)しいの義しくないの、そんな品さだめの世界は私の存知せぬものだ。イエスは私の万斛(ばんこく)の涙を御存知だ。それだけでいいのだ。》

ここは昨日の続きみたいなところで、小池辰雄の十字架を受けとった心情が吐露(とろ)されているところです。この十字架は、キリストが真中で、左右に悪いことをした悪人二人がやはり磔刑(はりつけ)にされていた。イエスを中心に右と左に悪人が十字架されている。その一方の悪人のほうがイエスを罵(ののし)ったけれども、もう一方の悪人はこういう言葉を吐露する。

「御国(みくに)にお入りになるときに、せめて私を憶えておいてください」

と、いまわのきわで、助けも何もない時にこれを言うわけです。一方の悪人が、

「せめて、お願いですから、私のことを憶えておいてください」

と、ただそれだけ言っただけです。それを小池は「人間の悲願だ」と言っている。

「この悪人にとって、存在的な救いにあずかることである。神を畏れる砕けの心から滲み出た悪人の平伏しの悲願は、イエスの本願の心の緒琴(おごと)の琴線に深く触れたのである。」

と書いている。小池辰雄は「悲願」とか「本願」とかいう言葉をよく使います。悲願とか本願とかいうのは仏教の言葉です。我々の思いが悲願で、神さまの願いが本願だと普通書いてある。その通りなんですけれども、僕は、本願があるから悲願が湧いてくるのだと思う。神さまの願いがあるから、それに応えて我々は願いがまた起こってくるということです。悲願という言葉を使うと、ちょっと仏教的でわかりにくいけれども、ここで小池は、

「これほどなぐさめ深い、情け深い、どん底の思い遣りの、抱きかかえの、白熱の愛の言葉があろうか。私には正直なところ、これがイエスの言の中の最愛の言である。」

と言っている。小池にとっては、これが一番のなぐさめ深い本願の言葉だという。悲願というのは、

「私の全存在はこの言に荷われている。抱かれている。私は愛に飢え渇いている男だ。

力あるイエスの愛。決して棄てない愛、うらぎらない愛。生命を与え、歓喜をみなぎらせ、光で包み、愛泉を湧き出させ、大慈悲心をわがうちに起こさせ、大乗的に生かしめるイエスの愛！」

こういうことを言っている。悲願というのは「神さまに抱いてほしい」ということです。我々は、神さまの懐の中に入って抱いてほしい、抱きかかえてほしい。それが我々の願いなんです。それが悲願ということです。それを小池は正直に言っている。

「抱きかかえられている、光に包まれている、生命に包まれている」

という、それが小池が体験した十字架の受けとり方です。それが我々の悲願なんです。「悲願」とか「本願」とか言ったら、これはちょっと距離がありますけれども、小池にしてみたら、

「神さまに抱かれている。神さまに生命で満たされている。どこに立っても裏切らない愛で包まれて、光に包まれている、生命に包まれている」

という思いが小池の思いとしてここに出ている。それが人間の悲願ですよ、ということを言っている。神さまの生命に包まれてほしい、包んでほしいというのが人間の悲願なんです。それをイエスは、いまわのきわの悪人の願いをパッと受けとって、

「そうだよ、お前は本当によく心が砕けて貧しくなったね。私は本当に今日、お前と一緒にパラダイスにいるんだ」

ということをイエスは、いまわのきわの人間に言う。そうすると、小池はここで、

「人類の中で一番初めて天国に入ったのはこの悪人です」

と言うわけです。それが人間の本当の願いです。

「イエスに、光に、生命に抱きかかえられて包まれている」

と、そういうことはあまり思わない。いざとなったら、人間は弱いですから――小池も「自分は弱い男だ」と言っているでしょ――本当に「いまわのきわ」とか、もうどうしようもなくなったら、そういう願いが自ずと出てくる。小池はどこよりも、この十字架の一方の悪人の願いが、自分と本当にピッタリだということを言っている。そこまで十字架を深く深く受けとっている。だから、

「私の全存在はこの言に荷われている。抱かれている。私は愛に飢え渇いている男だ。力あるイエスの愛。決して棄てない愛、うらぎらない愛。生命を与え、歓喜をみなぎらせ、光で包み、愛泉を湧き出させ、大慈悲心をわがうちに起こさせ、大乗的に生かしめるイエスの愛！」

本当にキリストの愛に包み、呑み込まれている、その思い、その歓びが小池の願いとして、感情としてここに出てきている。それをこの悲願と本願というふうに――人間が「ああ何とかしてほしいなぁ」と思ったら、必ず神さまはそれよりも先に神さまの願いで人を包み込むということを――小池は自分の経験から言っている。

「今日、あなたは私と一緒にパラダイスだ」

と言っているけれども、ここで小池は、

「私はこの愛で生きている。呼吸している。しかも今日だけではない。

今日も、明日も、次の日も。地上にある限り、毎日毎日がイエスと共にパラダイスなのである。」

「毎日毎日がパラダイスなのだ」と言っている。決して、「今日、お前と一緒に」という、一瞬の出来事ではない。それは毎日毎日――朝起きて、昼は働きますでしょ――そういう

「一瞬一瞬が全部パラダイスだよ」

ということを心情として言っている。これほど自分を深く慰めている言葉はないということで、この記事をここに書いたのだと思う。それが「十字架（ゴルゴタ）」というところのものです。これは非常に重要な小池の体験ですし、我々も本当にこういうふうなところで、

「裏切らない愛で包まれている」

ということを教えられていると思います。

●御霊の実

それで、「御霊の実」ということで、今日は学びたいと思う。

「福音を生きるとは、命輝く歓び、平安、力、自由、大希望の事態です。」

と、このセミナーの主旨に書きましたけれども。

「福音を生きていると、自ずと御霊の実が稔ってくる」

ということを、今日は主題にしたいと思っている。ガラテヤ書の5章22節、

「22**これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、23柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。24キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。25わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。**」（ガラテヤ5・22～25）

と、パウロは言っている。「御霊の実」というのはここに書いてあるように、

「愛、喜び、平和（平安）、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」

ということを言っているけれども、これは自ずから出てくるものなんです。さっき「十字架（ゴルゴタ）」のところを読んでもらいましたけれども、そのちょっと前のところ、114頁の初めのところから読んでみたい。

「自らはつぐない得ぬ人間の罪をつぐなったイエスのこの「赦し」こそ贖罪の大愛である。敵を愛する愛の根底は、イエスのこの愛にある。おのれを敵とした敵に対して救をもたらしたこの事実、この現実。これが愛の極みである。我々の過去、現在、未来の罪過一切をゆるしておられる十字架のキリストの砕けそのものによって、我々の心

は初めて砕かれる。人間の心一切の問題は、この十字架の贖罪の無条件的「ゆるし」を受けることによって、解決への道が拓かれてゆく。これを本当に身に受けた人は、人を「さばく」ことができなくなる。パリサイ根性がぬけてゆく。」

この「ゆるしを受けた」ということは、「無条件にゆるされている」ということです。小池が体験した、

「十字架の贖罪の無条件的なゆるしを受けた者にとっては、本当にそれを身に受けた人は――これは小池のことです――人をさばくことができなくなる。パリサイ根性がなくなっていく。」

と、これは自然にそうなっていくんですよ、ということを言っている。もう自分が十字架を無条件に受けとって、その愛の中に入れられたら、人を審くというようなことは全然無関心になっていく。自然に人をゆるしてしまう。もう人のことなんて気にならなくなる。本当に神さまと一対一になるから――この人間社会というのはパリサイ根性だらけでしょ、「あいつはどうしたこうした」と。けれども――そういうものは全部、自然になくなっていくんですよと、

「パリサイ根性がぬけてゆく」

と言っている。そういう、

「人を批判するような思いがぬけていった」

ということを小池は言うわけです。

「本当にこの十字架の無条件の贖罪を受けとった人は、人をさばくことができなくなる。パリサイ根性がぬけてゆく」

これが小池が言っていることです。それが今、ガラテヤ人への手紙で読んでもらった、

「御霊の実は、愛、喜び、平和（平安）、……」

なんです。これは自分で平安になるとか、自分で喜ぶとか、自分の力では絶対にできないことです。平安をいただくとか、寛容とか、親切とか、これは自ずから自然に出てくることをパウロが言っている。「御霊の実は」と言っている以上は、これは自分から決して出てくるものではない。十字架を受けとったら、人をさばく思いやパリサイ根性がぬけていって、そのぬけていったあとに、霊の実が結んでいくということなんです。二段構えではない。キリストの十字架を受けとったら、もう自ずとその瞬間から同時に、パリサイ根性がぬけていって、自然に御霊の実が人間の中で結ばれていきますよということです。それが愛であり、歓びであり、平和であり、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制なんです。自分からは、そういうものは出てこない。自ずから自然に出てくるのが十字架の凄さなんです。十字架を受けとると、これは本当に自然に出てくる。

●赤ちゃんの生き方

だから、僕がここに書いたのは、赤ちゃんの生き方です。

「彼らが――赤ちゃんが――生きる歓びを喜々として全身で現わしているような、ごく自然なあり方です」

と。この「ごく自然なあり方」が重要です。自分で何かしようとかいってやるのは、肩に力が入って、できない。十字架を受けとると、ごく自然な生き方ができるようになる。そのごく自然な生き方ができるのが、ここのガラテヤ書でパウロが言っていることです。

「霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」

と。これは、人と接するときにこれほど重要なことはない。人の社会で問題が起こるのは、必ずパリサイ根性が巣くっているから、問題が起こる。

「あいつが何か言った、あの人の言葉が気になる」

とか、社会の中では全部それでみんな悩んでいる。ところが、キリストに十字架された者は、自ずと自然にこの愛が迸り出てくる。

「喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」

と、いいことだけが自ずとそういう世界が出てくる。そういう人が一人いるだけで、そのグループというか、その関係が物凄く豊かに稔っていく。一人、誰かパリサイ根性みたいな人がいて、しょっちゅう悪口言っているようなグループの中にいると本当に暗いです。ところが、パウロのように、「御霊の実はこうですよ」と言っている人が一人いるだけで、そのグループは非常に豊かに温かいものになっていきます。それは自分の力では絶対にできない。これは自ずとです。ごく自然な在り方で我々は生きている。肩に力をいれて生きていくのではない。僕らに天国を開放してくださったのがごく自然な在り方なんです。

それは赤ん坊を見ていたらわかる。赤ん坊は本当にごく自然に自由に生きていますでしょ。あれがこの「御霊の実」とパウロが言っていることなんです。改めて「御霊の実はこうですよ、ああですよ」と言うと、これがまた律法主義になる。「こうしないといけない」とか――そうじゃないですよ――そうすると、これはもう信仰ではなくなってしまう。神さまとの関係がなくなってしまう。神さまは初めから、

「御霊で人に愛が溢れ、喜びが溢れてほしい。平安で生きていってほしい」

と、そういう神さまの本願、願いがあるわけですから、それが自ずと自然に出てくるのが十字架の凄さなんです。それを小池はここで言っている。人を審くことができなくなる。パリサイ根性で人を変な目で見なくなっていく。これが自然なかたちなんです。

赤ん坊の姿を見ていると、それがわかる。赤ん坊のような姿が、十字架で我々が新しく天国をもらったということ。それがここで言っていることです。本当にごく自然に溢れて出てくるものが本当の姿です。自分で力んでやっているのは本当の姿ではない。ごく自然に溢れ出てくるものが、凄く人を動かす。これが力なんですよ。力というのは人を動かす。

その「ごく自然に出てくる」というのは、ヨハネ福音書4章に書いてある。パウロが言っているような愛とか慈悲心とかが自然に流れてくる。4章というのは、イエスとサマリアの女との会話です。サマリアの女に

「水を飲ませてくれ」

と言う。ところが、話がちょっとズレていって、

「私は永遠の生命、生きた水を持っているよ」

と言うわけです。そうしたらサマリアの女は、

「そんないいものだったら、もう汲みに来なくてもいいから、その生きた水をください」

とか言っているでしょ。そういう会話のところで、

[13]**イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。**

普通の水ではまた渇きますよと言っている。

[14]**しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。**

「そんなことがありうるかな?」と、サマリアの女は思ったでしょうね。

わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」

「わき出る」と書いてある。

「自ずと湧き出てきますよ、私を飲んだら。私を食べたら、自ずと川となって泉となって自然に出てきますよ」

というのがここなんです。自然に出てくるという、非常に単純なんです。自然に出てきて愛が迸り出る。

「永遠の命に至る水がわき出る」

と書いてある。これは愛が溢れていく、自ずと自然に出てくるということです。だから、凄い約束をしてくださったんです、キリストは。サマリアの女はそれに打たれて感動した。異国のサマリアという、ユダヤ人から軽蔑されていた民ですからね。そういう女の人との会話では、

「私の与える水を飲む者は、その人の内から、その内側から、泉となって永遠の生命の水が湧き出ますよ」

ということを言っている。それがサマリアの女との会話ですけれども、同じようなことを言っているのがもう一つある。

それはヨハネ福音書7章37節、「生きた水の流れ」というところです。ここも同じようなことが書いてある。

[37]**「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。**

大声で言われたんですよ。

「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。
「渇いている人、苦しんでいる人、もうどうしようもないような人は、私のところへ来なさい。そして私を飲んでくださいよ」
ということを、大声で言っておられる。「来いよ、来いよ！」と言っているんです、大声で。
「私のところへ来たら、もう絶対大丈夫だから。私のところへ来て飲みなさい。私を飲んでください」と。

38 **わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」**39 **イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている〝霊〟について言われたのである。**」

十字架のあとの霊は物凄い温かい霊ですから、
「その霊が自ずと自分の内から湧き出てきて、川となって流れでますよ、愛が流れますよ、生命が湧き出ますよ」
と。これはどんな川か知りません。チョロチョロした川かも知れないし、人によっては。けれども、大河かも知れませんよ。
「そういう生きた水が川となって流れ出ていく。私を飲んだらいい。渇いている者はみな飲みなさい。そうしたら、生命が湧き出ますよ」
と。これが自然な姿なんです。これは自分からはこんな泉なんか湧いて出てきませんよ。

「あなたは光である。地の塩である」

とか言われます。あれは自分で塩になれない。自分で光になんかなれない。光はやはり上からくるしか出てこない。これが十字架の凄さですよ。その十字架の凄さで自ずと、「御霊の実は愛、平和、親切……」とパウロが言っているように、これは本当に凄い楽しい世界、喜びの世界です。喜んでいたら、これは自然にそういうふうになっていきますから。そういうことがこの「御霊の実」なんです。
「福音を生きる」ということは、こういう生き方をしてほしいということ。ごく自然な生き方をしてほしい。そうすると、パリサイ根性がぬけていく。人を審くようなこともぬけていく。そうしたら、「出てくるものはいいことばっかりですよ」ということをパウロが言っている。「御霊の実は愛、喜び、平和（平安）」と、「喜び」とまず言っている。そして親切にしたりということが自ずと出てくる。それが「御霊の実」です。二段構えに、「キリストを信じたから、こうしないといけない」というような受けとり方をしたら、これはとんでもない。自分からはそういうものは絶対に出てこない。そういうことを小池は、

「今日、お前と一緒にパラダイスだ」

ということで、これは「毎日毎日」と言っている。一瞬一瞬がそうです、今日だけとは違うんですよと。
「毎日毎日、あなたは物凄い豊かな世界の中に入れられている。毎日毎日が本当に

御霊によって、川となって生命が溢れる、愛が溢れていきますよ」ということを言っている。毎日毎日なんです。毎日毎日、自分からそんなことをしてたら、しんどくてたまりません。ところが、これは自ずから出てくるから、毎日毎日やっても楽しいわけです。

「自分で何かをしなければならない、自分で親切にしなければならない、愛を生み出さなければならない」

とかやったら、もうしんどくてたまりません。そういうことではない。

赤ちゃんが生きている、あの姿が福音の姿なんです。それが本当に人を動かします。赤ちゃんを見たら、感動するでしょ。あれは赤ちゃんの力ですよ。あの力で我々は感動する。だから、我々の存在も、ある意味では、

「喜んで生きていると人を感動させる」

というようなことにまでいかないと、福音を本当に生きたということにならない。

●盲人バルテマイとザアカイ

目の悪いバルテマイの話がありますね（マルコ10・46～52）。あの人は

「目が見えるようになりたい」

という願いがあって、

「イエスさま、イエスさま！」

と叫ぶわけです。「うるさい」と弟子たちは言うけれども、イエスはそれをパッと受けとって、あのバルテマイの中には何かとんでもない願いが、悲願がこめられているというのをイエスは受けとるわけです。だから、

「あいつを呼んでこい」

とイエスが言う。弟子たちが行って、

「喜べよ、お前を呼んでおられるよ」

と。そうすると、バルテマイという人は躍り上がって上着をぬいで跳んで行くというわけです。目が見えるようにしてほしいという願いがあるけれども、もう呼ばれただけで――まだ目が開けてない前ですよ――呼ばれているというだけで、バルテマイは躍り上がって跳んで行くわけです。僕はあの記事を読むと、本当に感動する。あれが自然な幼児（おさなご）の姿なんです。ああいう姿が人を動かす。この記事を書いた人はやはり、そういうバルテマイの動きに感動したから書いて遺したと思う。

それが二千年たって、民族も違っているのに、我々を感動させるでしょ。やはりバルテマイのそういう姿は感動しますよ。それは自ずと――自分が何かを伝えようとか、そういう思いは全然、バルテマイにはなかった――ただ喜んで、上着をぬいで躍り上がって、イエスの所へ行った。あれはやはり周りの人を感動させるわけです。そして二千年たった我々

も、あのバルテマイの記事を読むと感動する。それが赤ちゃんの世界ですよ。それが天国を私たちに開示してもらったということで、そこでも出てくる。

バルテマイという名前は残ってますけれども、どんな人か分かりません。あとどうなったか分かりませんけれども、あの時のバルテマイの思いは本当に子供と一緒、赤ちゃんと一緒です。本当に喜んで喜んでイエスの所へ行く。そして目が見えるようになる。けれども、目が見える前に、もう呼ばれただけで喜んでいる。

我々も、キリストに声をかけられるだけでも本当に喜んだらいいと思う。僕はいつもバルテマイのこの記事を読むと、本当に感動する。僕は天国に行ったら、バルテマイに会いたいなと思う。

「あなたは物凄く喜んだね！」

とか言って、握手ができたら嬉しいですね。

もう一人、僕が感動するのはザアカイです（ルカ19・1～10）。あのザアカイも、僕は感動する記事の一つです。彼も子供みたいな人ですよ。イエスの噂を聞いていたんでしょうね。イエスの一行が来るというので、自分は背が低いから桑の木によじ上って、上からイエスを見るわけです。そうするとイエスは、

「ザアカイ、下りてきなさい。あなたの家に泊まりたい」

と言うわけです。そうしたら、ザアカイは本当に喜んで、自分が悪いことをしたことを

「もうこれから悪いことはしません。ちょろまかすことなんかもうしません」

と言うでしょ。そうしたら、イエスに会っただけで、ちょろまかすことなんか忘れていくわけです。それがごく自然な在り方なんです。イエスという方は凄い方だから、会うだけで、言葉をかけられるだけで、ザアカイは変わっていった。そして、子供のように喜んで、「もう悪いことはしません」と。そしたら、イエスは

「今日、この家に救いがきた」

と言って、誉めておられる。そういう在り方がごく自然な在り方なんです。バルテマイにしろ、ザアカイにしろ、ごく自然な在り方で福音を我々に伝えてくれている。そういう在り方が非常に尊いんですね。

これはごく自然な在り方です。赤ちゃんが嬉々として喜んでいる、そういう喜びの姿と本当に重なるわけです。我々は決して二段構えで、

「キリストをいただいたから、何々しなければならない」

とか、そういう世界だったら、しんどいですよ。まぁ、やりたかったら、やったらいいけれども。そんなことをしていたらしんどいから、素直に毎日、子供のように生きていてほしいなと、これが僕の思いです。それがこの、

「どんな人も幼児のように一人の子供に生まれ変わってほしい。生き生きとして永遠の生命に生きていてくれさえすればもういい」

これが本願、神さまの願いです。この神さまの願いは物凄く単純です。それのきっかけはいろいろあります。けれども、最終的にはキリストの願い、神さまの願いというのは、

「本当に幼児のように光って生きて、喜んで生きてほしい」

ということです。そのためには――昨日お話しましたね――生まれ変わらないとダメなんです。このままではできない。やはり、生まれ変わるということが非常に必要です。それが十字架なんですね。十字架で初めて生まれ変わることができる。

「本当に生まれ変わって子供のようになってほしい」

というのが神さまの願いですから、それを僕はここに書いた。それを生活の中で毎日毎日、それで喜んで生きてほしいというのが次の、

「生活のなかで全存在で福音を生きて欲しい」

ということ。これはバルテマイもザアカイも全存在で喜んだでしょ。そういう、

「生活のなかで、全存在で喜びに満ちて、福音を生きて欲しい」

というのが神さまの願いなんです。決して神さまは、私たちに沈んで生きてほしいとは言ってない。だから、

「福音を生きるというのは、物凄い命輝く歓びであり、平安であり、力であり、大自由であり、復活があるから大希望の中で生きていく。それをあなた方一人ひとりに全部与えた。また、与えるんですよ。どうして受けとってくれないのか」

というのが、神さまの悲しみですよ。

「本当に生きてほしい、こういうふうに生きてほしい」

というのが神さまの願いです。

●イエスは命のパン

ヨハネ伝6章の「イエスは命のパン」のところを読んでいただきましたけれども、「パン」とか「葡萄酒」とか「水」とかいうのはエネルギーを与えるものです。「飲む」とか、「食べる」とかいうのは赤ちゃんでも知っていることです。大人は、イエスが

「私を飲め、私をくらえ」

と言ったら、

「もう何を言っているのか!?　人食い人種みたいだ！」

とか言って離れていくでしょ。けれども、子供はこれを知っているんですよ。子供は、食べること飲むことは自然のことだから、そういう自然なことで

「私を食べてくださいよ」

とイエスが言われたのが

「私はパンである」

ということなんです。本当に「食べる、飲む」というのは人間の一番基本的な動作でしょ。

誰にも教えられなくても、みんな知っているわけです。それをイエスは譬えとして、

「私を飲め、私を食べよ。子供でも、食べる飲むということは知っている。あなたも私を飲んで食べてくれさえすれば、永遠の生命があなたの中に湧き上がる。決して渇くことはない。永遠の生命、復活までいくんです。だから、食べてください、飲んでくださいよ」

というのが、このイエスの「生命のパン」の箇所なんです。これは譬えとしては物凄く分りやすい。もう子供が分かることでしょ、「食べよ飲め」と。ところが、大人になったら、「食べよ飲め」と言っているのに、食べたり飲んだりしない。イエスは、

「人の生きるのはパンだけではない。神の口から出る一つ一つの神の言で生きていくんですよ」

と言う。これが生命のパンのこと。先祖のモーセが天からのパン、「マンナ」というのを与えたけれども、私はそんなとは違うと。モーセが与えたパンは一日限りです。けれども、

「私が与えるパン、私自身を飲んで食べたら、永遠の生命が与えられますよ」

と言われる。

[35]**イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない。」**

ということを言っている。6章39節に、

[39]**わたしをお遣わしになった方〔神さま〕の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。」**

「一人も失わない」ですよ。キリストのところに来たら、絶対無条件に一人も失わないで、終わりの日に復活させる。

「食べて飲んだりしてくれたら、終わりの日には必ず例外なしに復活させますよ」

ということです。

なんで復活が大切かといったら、「十字架は贖い」というでしょ。けれども、あれは周りから見たら、敗北ですよ。死んだんですから、殺されたんですから。あのままいったら、もう敗北そのものです。ところが、復活ということで、もう敗北でなくなった、勝利に変わったんです。だから、復活というのは非常に大切なことです。死んで贖って、終わりではない。それで復活したから、我々には大希望があるんです。

我々が赦されて、もう本当にスッカラカンになって、無にされて、物凄く喜んで、生きている間には川となって流れていく。しかも、これはキリストが復活されたから、

「将来、大希望の復活の姿に変えられますよ」

と。だから、福音というのはこの地上だけではない。これは次の世界にまで続く大希望の事態なんです。私はここに、

「福音を生きるとは、命輝く歓び、平安、力、自由、大希望の事態です」

と書いた。この復活がなかったら、これは意味がない。十字架だけだったら、もう敗北ですよ。だから、復活というのが非常に大切で、

「その復活の生命にあずかります。一人も失わないで、終わりの日には必ずあなたを復活させる。それが父の御心です。子を見て信じる者が、イエスを信じる者が、皆永遠の命を得ることがある。必ず終わりの日にはその人を復活させますよ」

ということをキリストは約束してくださっている。これが約束ですよ。「イエスの命のパン」のところで約束している。

「[46]**父を見た者は一人もいない。神のもとから来た者だけが父を見たのである。**

これはイエスのことですね。

[47]**はっきり言っておく。**

「お前はしっかり聞いておけよ」というわけです。

信じる者は永遠の命を得ている。[48]**わたしは命のパンである。**

「もうイエスを信じたら生命を得ているんだ、心配することはないんだよ。はっきり言っておく。覚えておけよ、もう忘れるな。信じる者は永遠の命を得ている。私は生命のパンである、生命の飲物である」

と言っている。

[49]**あなたたちの先祖は荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった。**[50]**しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。**

重ねて重ねて、違う言葉でこの復活のことを言っている。

「永遠の生命を得るんですよ」

ということを言っている。

[51]**わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。**

「永遠に生きる」とか、「復活」とか、想像できませんよ、我々は。そんなのは絶対に想像はできないけれども、信じるしかないんです。信ずるから、これが大希望なんです。希望なしに死んでいくわけではない。大希望を約束されているから、

「死ぬことも益である」

とパウロが言っているように、これは本当に大希望の福音なんです。

わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」（ヨハネ6・35～51）

「世を生かす」と言っている。

「この地上では、世を生かすためのパン、肉なんですよ」

と言っている。これは社会生活が大切ですから、この「世を生かす」というのは、自分だけが死んだら復活するというのではない。ここに生きている間も、世を生かすための、

「私を食べたら、そういう世を生きる凄い平和な社会になっていきますよ」
ということを言っている。重ねて重ねて、イエスは言っている。

「53**イエスは言われた。「はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。**

これも「はっきり言っておく」と最初に言っているでしょ。

「まことにまことにお前に伝えるよ、もう忘れたらいかんよ。はっきりはっきり言っておく」
ということです。

54**わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。**

これを重ねてここで言っておられる。

55**わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。**

56**わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。**

「私を食べてくれたら、あなたの中に生きていきます。あなたの中にも私が生きますよ」
と。キリストと私たちが一つになる。これが「和解」ということ。

「一つになる」
ということが「和解」ということですよ。それをここで言っている。

「いつもわたしの内におり、わたしもいつもその人の内にいるから、頼むから私を食べてくれ。はっきり言うよ。私を飲む者は、私を食べる者は、永遠の生命を得て、死ぬことはない。だから、私を食べてください、私を飲んでください」
と言っている。

「人の生きるのはパンだけでなく、神の言葉で生きる」
という。これでは二段構えになってしまいますよ。ここでは、はっきりと――同じイエスですけれども――「私の肉を食べ、私の血を飲んでほしい」というのが願いです。

「食べる、飲む」ということは、日常生活の一番基本でしょ。「食べる、飲む」ということがなかったら、力が出てきませんもの。それが、ここで

「内の力として湧き出てきますよ」
ということをはっきり言ってくれている。これほどわかりやすい譬えはない。けれども、イエスが生きているときに弟子たちは、

「私を食べろ、私を飲め」
なんて聞いたら、

「なんだ変なことを言うおっさんだな!?」

なんて思ったかもしれません。けれども、もう今となったら、これは本当に基本中の基本なんです。そうすると、

56**わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。**

と。「いつも居りますよ」ということを言っている。

「わたしもまたいつもその人の内にいる。四六時中あなたと一緒ですよ」ということを言っている。そういう生き方をしてくださいというのが、「福音を生きる」ということです。

57**生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。**

これも重ねて言っている。

「本当に私を食べ、私を飲んでください。そうすると、本当に生命が湧き出ますよ」ということを言っている。

ヨハネの福音書というのは、「永遠の生命」ということがたくさん出てくる。だから、物凄く読みやすい。それが約束されている。ヨハネの福音書は本当に永遠の生命です。

「決して死なない生命をお前に与えるから、私を何とかして食べてください、何とかして飲んでください。毎日毎日ですよ。食事を毎日とるように、毎日水を飲むように、私を食べてください、私を飲んでください」

と。これができるのは、やはり十字架によって変えられなかったらできない。けれども、これは二段構えではない。もう受けとったと同時ですよ。だから、小池は、

「信即行」

と言う。

「信じてから何か行います」

という、二段構えではない。

「信じたらその瞬間からもう同時にこういう世界に入っていきますよ」

ということを言っている。ここで、

63**命を与えるのは〝霊〟である。肉は何の役にも立たない。**」（ヨハネ6・63）

と、はっきり言っているでしょ。霊が命であって、本来の人間の姿は何の役にも立たない。御霊によって生きないと何の役にも立たない、ということをはっきり言っている。

「命を与えるのは〝霊〟である。肉は何の役にも立たない」

と。命を与えるのは霊であって、肉によって命なんか与えられませんよ。だから、肉は何の役にも立たないと言って、切り捨てているでしょ。生命を与えるのは御霊なんです。肉は何の役にも立たないと。これははっきりとイエスは言っている。

わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。

イエスの言葉は全部、生命（いのち）なんです。どの一つをとっても生命です。次元が違う。イエスの言葉は全部、次元がちがって、生命を与える言葉なんです。だから、ここに、

わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。

と。

「肉は何の役にも立たないから、霊の生命をもらってくださいよ」ということです。そのためには、十字架と復活そして毎日毎日キリストを食べ飲むということが重要ですよ、ということを約束してもらっている。これはやはり大希望なんです。

「自由」という言葉もあります。自由というのは、

「パリサイ根性がぬけていく」

というのが自由ですよ。「何々からの自由」と「何々への自由」という二つのことが言われますけれども、二段構えに考えたらダメです。あれは同時です。自分が自由になったら、また人への自由を与えることが同時にできる。あれは二段構えに考えたら、律法主義になってゆく。二段構えではない。自由を与えられたということは即、やはり人への自由、愛への自由というふうになっていく。これが自由の本質です。

こういう素晴らしいものを、本当に身近な人々にもわかってほしいなということです。すべてが恵みなんですから。自分から出るものは一切ない。全部もらったものです。だから、恵みの上にさらに恵みを増し加えられてある。アルファ（始め）にしてオメガ（終り）、「いろは」の「い」から「ん」まで全部、恵みで貫かれている。すべてが恵みで、恵みがアルファにしてオメガ。そうすると、自ずと讃美と感謝が出てきます。小池辰雄が、

「我々は、キリストに出会った者は、讃美するために生まれたんですよ」

ということを言っている。

赤ちゃんの姿を見ていると、嬉々として喜んでいるでしょ。あれは讃美の姿ですよ。赤ちゃんには十字架なんか要りません。もう生まれた時から、神さまの懐からきたから、天真爛漫で神さまを讃美しているあの姿、赤ちゃんのあの喜びの姿は神さまを讃美している姿ですよ。我々は赤ちゃんなんかを見ると、いろんなことを学びます。聖書から学ぶ以上に学ぶんですよ。赤ちゃんを見ても、なかなか気づかないかもしれないけれども、十字架で贖われてしまうと、そういう目でものを見ることが段々とできるようになる。

赤ちゃんの姿というのは天国の姿、讃美する姿だと僕は思う。そういう光の子へとみんな変わってほしいというのが神さまの願いです。それがご本願です。そのご本願を受けとって、我々の悲願として神に祈るわけです。こういうことにしてほしいというふうに願うことがここから湧いてくるわけです。

●目標を目指してひたすら走る

ピリピ書の3章10節、

「10**わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、11何とかして死者の中からの復活に達したいのです。**

「復活」というのは、我々は想像できませんよ。パウロがそのあとでこう言う。

12**わたしは、既にそれを得たというわけではなく、**

復活の姿になったというわけではない。そこまでまだ達していない。

既に完全な者となっているわけでもありません。

そうですね。生きている間に復活なんていうのはありえないから、まだまだそこまでは達していないという。

何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。13兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、14神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」（ピリピ3・10～14）

このパウロの意気込みですよ。これを学びたいなと思う。自分は捕えられたから――全部完成していない。何もまだ未完成だけれども――

「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ」

と、もう過去のことは忘れたらいいんだよと。後ろのものを忘れ、未来に向かって全身を倒れこむばかりに――全身を未来へ向けるわけです。倒れこむように前のめりになって全身で――キリストが与えてくださる賞を得るために、その目標に向かってひた走りに走りたいと言っている。

「あとでお与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走る。もう過去のことはいい。ひたすら前を向いて、つんのめりながらでもいいから、どんどん走って、賞を得るために走り続けよう」

ということを言っている。自分で走り続けたら、しんどいですよ。自分でやったら、しんどい。けれども、パウロのこの意気込みです。パウロは

「自分は神さまの、キリストの愛にかられて宣教している。宣教しないと、自分は不幸だ」

という言い方をしている。このピリピ書は晩年の書と言われていますけれども、晩年になってもパウロは

「まだまだ到達していない」

ということを言うわけです。

「ただただ、ひたすら前に向かって前進したい」

という思いがここにある。その

「目標を目指してひた走りに走りたい」というパウロの意気込みを知ってほしいと、ここに引用しました。

けれども、信仰の度合いが皆さんにあります。それぞれの信仰の程度というものがあるから、ここでパウロが言ってくれている。

「16**いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。**

「無理をしてはいけません、その信仰の度合いがあるんですよ」ということです。その人生の中で自分の到達した限りにおいて努力が必要です、無理をしたらダメですよという意味です。けれども、目標に向かっては、やはりひた走りに走りたいという意気込みがあるけれども、信仰の程度に差があるから、

「あなたはこの辺で――妥協するのではないですよ――私のようになってほしいんだけれども、それでも、信仰の度合いに応じて前に向かって進んでください」ということを、パウロはここで言っている。

17**兄弟たち、皆一緒にわたしに倣(なら)う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。**18**何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、**

ここに「涙をもって」という、パウロの思いですよ。熱い思いで、もう泣きながらであってもいいから、こういうふうになってほしいということをパウロが言う。

キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。

キリスト者というのは非常に少ないでしょ。

19**彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。**

我々は違う。キリストの愛によって生きるから、そんな恥ずべきことはしないんですと。

20**しかし、わたしたちの本国は天にあります。**」（**ピリピ3・16～20**）

「私の思いはもう天にある。私は天から来たんです。だから、地上のことは忘れて生きていきましょう」

と、パウロはピリピの信徒に言うわけです。

「とにかく、涙ながらにあなた方に言っておくけれども、キリストの十字架に敵対する人は多い。けれども、あなた方は選ばれた者で、あなた方の国籍は本当に天国にあるんだから、ひた走りに走ってくださいよ」

という願いを、パウロがピリピの人に書いたわけです。

「私たちの本国は天国にあるんだから」

ということをここに書いている。このピリピの書簡というのは晩年の書簡ですけれども、

「なんとかしてキリストにある者はそこから外れないでひたすらに走ってほしいな」

という意気込みをピリピの人たちに伝えた。それを僕もここを読んで、学びたいなと思って、ここを引用しました。

これは獄中書簡と言われています。昔の牢獄というものは悲惨なものでしょ。だから、凄いですよね。パウロの意気込みというか、パウロがキリストに捕まえられて、この喜びを何とかして皆に伝えたいという思いがここに出ていて感動的です。

こういうものをパウロから学びたいですね。パウロはやはり逸材中の逸材ですよ。あの人が生きたその生きざまというのは、ここから学ぶことが物凄く多い。僕はパウロが好きなのは、本当にパウロは一生懸命でしょ。それがやはり好きですね。一生懸命にやってくれている。信徒のこと、自分のユダヤ民族のことを本当に思っています。

「キリストに裏切られてもいいぐらい、自分はあなた方のことを思っている」とか、そう言っているわけですから。パウロにしてみたら、同胞愛が凄く強かったんでしょうね。けれども、残念ながら、なかなか皆は十字架に躓いて、本当にキリストのところへ来てくれない。けれども、キリストのところへ来てくれたら、パウロの言っているように、これはもう本当に万々歳のハレルヤの世界ですよということを言っている。死に面しても、獄中にあっても、これほど豊かに烈しく熱く語ることができたんですね。

奥田昌道先生が、

『自分はパウロみたいにしっかりしていない、そんな力はないんだ』と、そんなことを言ってはいけません。あなたはパウロと同じですよ」

ということを言っている。キリストにある者は決して自分の力でやるわけではないから。大きさはいろいろありますよ。パウロの大きさ、僕らの大きさは、それぞれありますけれども、その人らしく生きるということが最も大切なんです。その人らしく生きるように、一人ひとり個性を与えて造られたわけです。本当に一人ひとり個性豊かに造られて、

「その個性豊かな者の中に私が宿るから、あなたらしく生きてくださいよ」

ということ。パウロのまねなんかできません。けれども、本質は一緒です。パウロの関わったイエスの本質は、我々も変わりませんから、パウロと我々はどちらが偉いかとか、そういう比較は絶対にできない。みんな同等なんです。その人に応じた働きかけがあって、その人に応じた使命が与えられている。けれども、パウロから学ぶことは多いですよ。ちょっとでもパウロから学べたらいいですね。

それでは、聖歌の「カルバリ山の十字架」(399番）と「いつかは知らねど」(623番）を歌って終わりにしたいと思います。